

サウンド・デザイン演習 2019
「授業で触れた題材にまつわる補足説明」と
「まとめ」



VERTIGO

(制作過程で使った映像について)

アルフレッド・ヒッチコック (監督) 『めまい』 (1958年公開) のオープニング映像

主演：ジェームス・スチュワート，キム・ノヴァック

音楽：バーナード・ハーマン

(ミニマル風の制作過程で使した映像について)

- ・ オープニング 「映像の制作」 は、 **グラフィック・デザイン** で著名な **ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996 , アメリカ)**
- ・ 1950年代～1970年代まで 多くの映画のオープニング映像を担当

↓ ソール・バスの映画オープニング映像集動画

<http://www.artofthetitle.com/feature/the-title-design-of-saul-and-elaine-bass/>

- ・ (本業であるデザイナーとして)
有名なコーポレーションアイデンティティ (C.I.) を多数デザインした
日本でも、味の素、京王百貨店、コーセー化粧品、紀文食品 など多数

ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996, アメリカ, グラフィック・デザイナー)





<http://flexbrandingdesign.com/2011/12/14/saul-bass-design-icon/>



<https://www.kose.co.jp/>



<http://www.kibun.co.jp/>



<http://www.vitbbs.cn/a/LOGOdaquan/2011/0328/18532.html>



<https://www.pinterest.com/pin/28921622584035590/>



「弊社は企業の若々しさや信頼性を表現できる「ブルー」と「ハト」をモチーフに、アメリカ人デザイナー、ソールバスに包装紙のデザインを依頼しました。商業デザイン、企業CIなどの分野で活躍したバスは、とりわけ映画のタイトルデザインの第一人者として知られます。「私はその中に、楽しさ、生命の祝福、それと同時に澄んだ静けさを表現しようと努めました」とバスが語るハトが連なって飛ぶデザインは、〔彼の作った映画オープニング映像の〕「黄金の腕」「悲しみよ こんにちは」「グラン・プリ」などに見られるモチーフの連続にも通じています。これにより、バスはアメリカの由緒あるデザインコンクールで最優秀作品賞を受賞しました。」



NORTH BY
NORTHWEST

(ミニマル風で使用した映像素材について)

- CG の実制作は、1960年代からの 「コンピュータアート」 の草分け
ジョン・ホイットニー・シニア John Whitney Sr. (1917 – 1995)

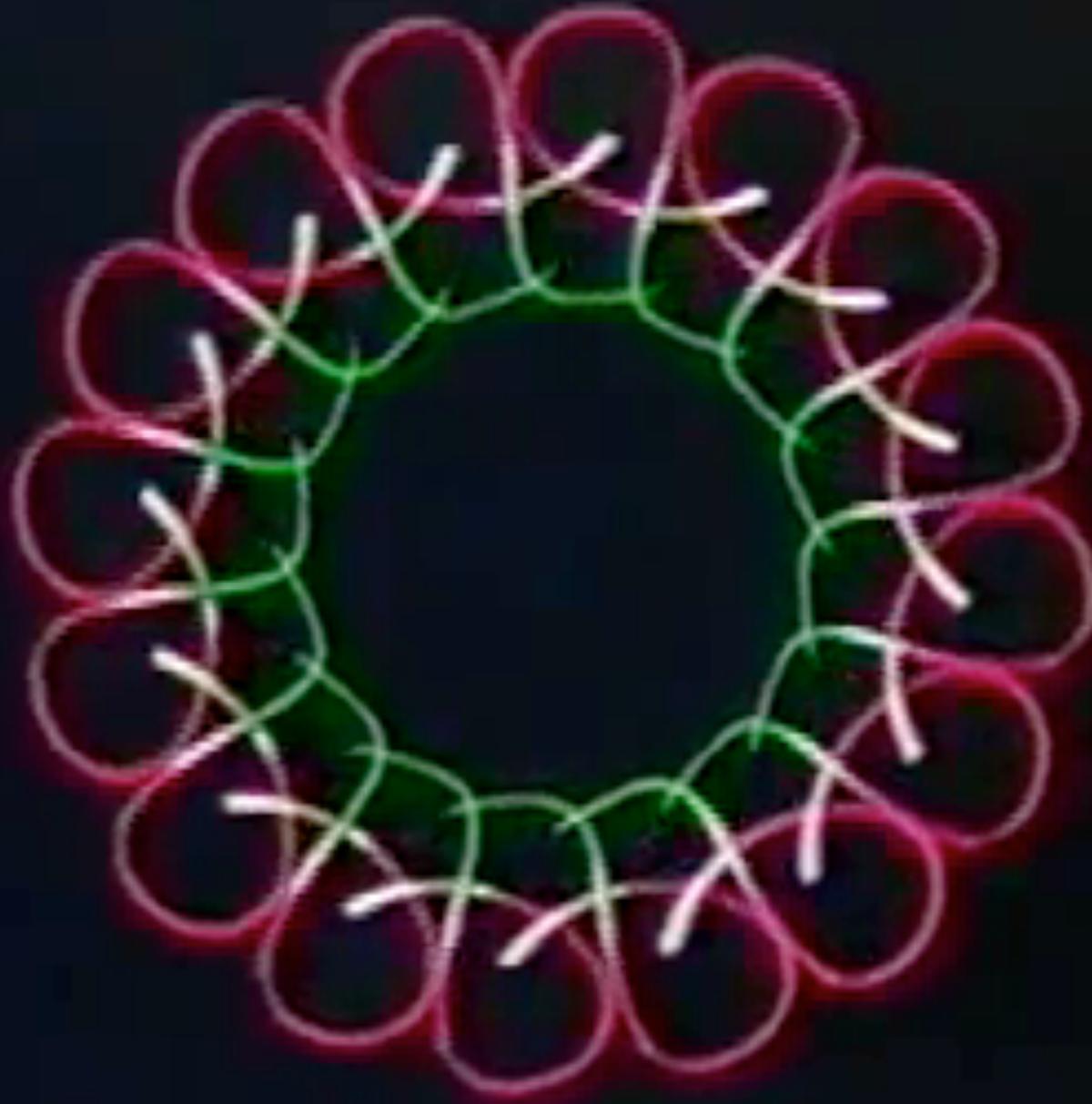
「 1950年代から1960年代にかけて、コンピュータアートとビデオアートが相前後して
展開を開始する。現在のメディアアートの直接のルーツは、ほぼ同時期に発展してゆく
ことになる この2つのジャンルにある と考えることができる 」

白井雅人ら『メディアアートの教科書』 フィルムアート社、2008年、12～13頁。

代表作の例

【youtube】 John Whitney "Catalog" 1961

<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>



1937～38年まで、ジョン・ホイットニーは、パリで 12音技法の作曲を学んだ経験がある
(wikipedia “Johon Whitney (animator)” より)。

〈コンピューターアート〉の代表作品
電圧制御の計算機とブラウン管モニター

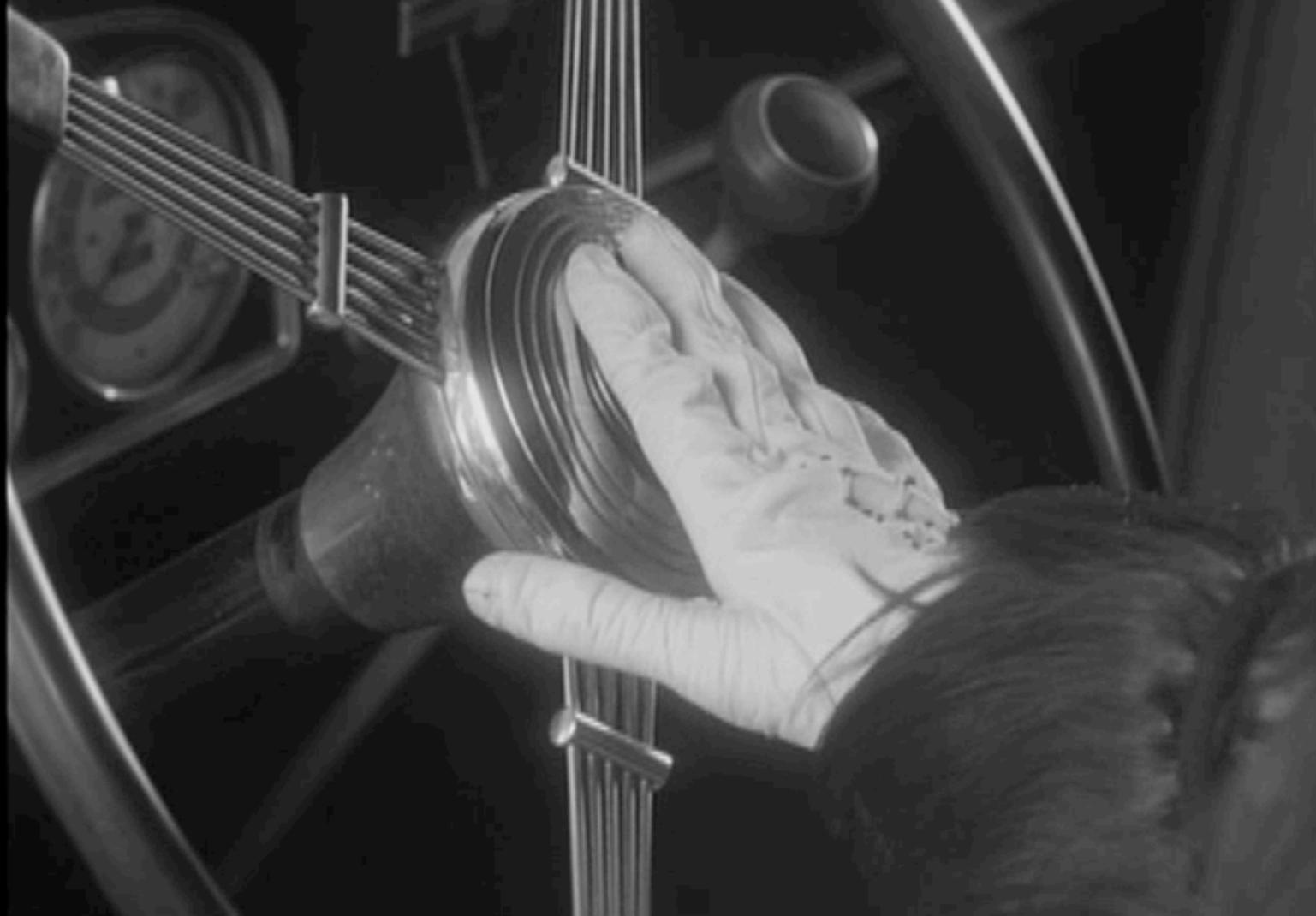
<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>

映画音楽の名曲 『めまい』 から 「愛の情景」 Scene d'amour (1958)

音楽：バーナード・ハーマン Bernard Herrmann



映画『アーティスト』(2011) 1:29:00 辺りのクライマックスシーンより(4分間)



今日の映画でも『めまい』(1958)の映画音楽「愛の情景」がオマージュとして使用されている。さらに、映像面でもまた、車を運転する女性を前方から写すショットは、ヒッチコック監督の特徴的な画面作りへのオマージュと考えられる(『サイコ』(1960)や『汚名』(1946)など)。

まとめ

音楽と美術を あえて区別しない視点の意義

～ 西欧近代批判の視点から

なぜ「音楽」と「美術」が、それほどまでに、違うものとみえるのか

- 西欧近代主義において（要素還元主義的側面）
- さらに、近代主義的世界観の自明視を土壌とした「言語のはたらきの一側面」において（言語は物の見方を規制する）



言い換えると

※「一つの物の見方」を自明視した上で、さらに日本語の言語の働きによって、そのように「違うもの」とみえているのではないか

しかし、その見方は、どれほど普遍的なものか？

(※のついた記述は石井の考え)

日本語の「美術」の語は、いつ、どのように誕生したのか？ ～「美術」の語史 1

- ・「『美術』は明治期になって初めて使われるようになったものである」
- ・「英語からの翻訳であり、この訳語を考えたのは大鳥圭介 (※西洋軍学者、官僚、外交官) であったとされる」
(※ 英語とは “ Fine Art ”)
- ・日本で初めて『美術』の語が登場するのは、明治5年 (1872) 、国民へのウィーン万博への出品勧誘のための官令。
- ・「音楽画学像ヲ作ルノ術詩学等ヲ**美術**ト云フ」
(※ **音楽、絵や像をつくる技術的工作、詩を作ることなどを美術という**)
- ・「わざわざこのような説明を加えるくらいであるから、当時『美術』が耳慣れない言葉であったに違いない」

上記出典はすべて以下

高階秀爾「美術」、『ブリタニカ国際大百科事典 16 ノウシ-ピョ 』、フランク・B・ギブニー (編集・発行) 、TBSブリタニカ、1974年初版、744頁。

日本語の「美術」の語は、いつ、どのように誕生したのか？

～「美術」の語史 2

- ・「音楽画学像ヲ作ルノ術詩学等ヲ美術ト云フ」(※明治五年 1872, 官令)
(※音楽、絵や像をつくる技術的仕事、詩を作ることなどを美術という)
 - ・「興味深いのは、右に引用した官令の注記でも明らかなように、
当初は『美術』は、『音楽』や『詩学』なども含めた『芸術』全体を意味するものと解されていたことである」
 - ・「このこと(※『美術』が『芸術』全体を意味していたこと)は、十九世紀後半において、英語の Fine Art が
きわめて広い意味に用いられていたことと対応するであろう」
 - ・「しかし、最初に登場してから五年後の一八七七(明治十)年には、すでに『美術』は今日とほぼ同じ意味
をもつものになっている」
 - ・「『美術とは、図画彫刻模型家屋の装飾等の工芸を云うなり、英語にて之をファインアートと称す、凡そ
美飾美観ありて人目を娛ましむる物を作る術なり、、、美術の字穩当ならずと雖も(※いえども)
今姑く(※今しばらく)之を襲用す」(大鳥圭介「日本美術」、『工業』第10号、1877年)
- ※「美術の字は、無理がなく自然だというわけではないが、とりあえずこの語を使ってみたい」

上記出典はすべて以下

高階秀爾「美術」、『ブリタニカ国際大百科事典 16 ノウシピョ』、フランク・B・ギブニー(編集・発行)、TBSブリタニカ、1974年初版、744頁。

日本語の「美術」の語は、いつ、どのように誕生したのか？ ～「美術」の語史 2

- ・「美術の字穩当ならずと雖も (※いえども) 今姑く (※今しばらく) 之を襲用す」

(大鳥圭介「日本美術」、『工業』第10号、1877年)

- ※「美術の字は、無理がなく自然だというわけではないが、とりあえずこの語を使ってみよう」
(大鳥圭介。「美術」の語を初めて創出し、使用した人。1877年の言及。)

- ※ 言葉は、社会の状況や文化、時代の価値観、政治性を背景として、新たに生み出されたり、意味が変化したりする。

「美術」と「音楽」の語が存在するから、その間に普遍的区別があるようにみえるが、しかし、それを自明視することは、藝術の本来の可能性を限定するだけではないか。

たとえば、日本にかぎってみても、2つの語が明確にあらわれるのは、すくなくとも約100年前にすぎないのだから。

しかも、当初はきわめて頼りなく使用されたものであったことも、頭の片隅にとどめておきたい。

音楽と美術の近代的区分を超えて

- ・地球上での自然界で、音をともしなわれない視覚的現象はない。
- ・「ミメーシス衝動」アドルノ
無音の映像にみた幽霊
- ・絵だから音は考えなくてもよいのではない。
音はつかわず音の存在を感じさせる必要がある。
- ・音楽だから視覚的要素は考えなくてもよいのではない。
音楽で視覚を喚起させる必要がある。

音楽と美術の近代的区分を超えて

- 「混沌」状態、分かりにく状態が、世の実相。
- わかりやすい認識法、説明法は、実相をとらえていないことをどこかで意識していきたい。

音楽と美術の近代的区分を超えて

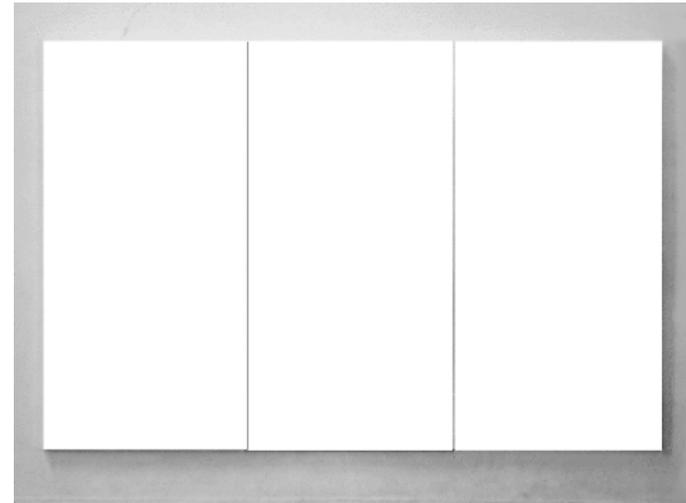
- そもそも「混沌」状態、分かりにくさこそ、世の実相。
- わかりやすい認識法、説明法は、実相をとらえていないことをどこかで意識していきたい。

音楽と美術の近代的区分を超えて

- とはいえ、つきつめていくと、やはり音楽ならではの形、美術ならではの形に、はからずもたどり着くことになる。
- ただし、これを自明視してスタートするのではなく、経験の結果つかむことでありたい。
- 世の混沌。わかりにくさの一端。図と地。

- 古代ギリシャ → 「ムーシケー」としての表現
B.C. 1000 – B.C. 100
- 中世 → 超越者を讃える表現
A.C. 400 – 1600
- 近世 → 王侯貴族を讃える表現（背景としての「王権神授説」）
1600 – 1800
- 近代 → 市民社会を讃える表現（神と貴族を否定）
1800 – 1960 近代主義のもと「**藝術**」の概念が誕生。自律化する。
- 現代 → 「西欧近代主義」（= 藝術）の省察。
1970 – その超克への模索。現代アート。

モダンアートの帰結（音楽篇）



音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の「進歩」は見込めなくなった。

しかしそれは「近代芸術」モダンアートの必然的な着地点であった。

啓蒙思想の性格： つまり「西欧近代」、「近代藝術」の性格。
つまり 今日、再考すべき藝術的論点。

- **西欧中心主義**

西欧こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義**

物事 (藝術を含む) の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
→ 物事を細かく区分しようとする考え

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え

- **人間中心主義**

人間は科学によって、自然を制御することができるとする。〈自然 vs 精神 (人間の本质)〉の二元論。

※ 映像の中の音楽の可能性

- 近代的〈藝術〉音楽を批判的に乗り越えるための映像音楽というあり方
 - 音楽が生まれる誘因 をとりもどすこと
(還元・純化・自律化 から、自然な文脈の中に音楽を再定位)
 - 視覚、物語、動作、(等) あらゆる表現要素への視点
それらとの相互関係としての音楽 → 関係性の中での価値創出
 - 映像は多様な文脈を作りうる (「語用論」的な意味の創出の重視)
 - しかし、近代主義における技術的成果を安易に批判するものでもない

「さしあたりは、われわれ人間が自然の一部でもあることを
認識することであり、ひいては、人間以上に偉大なものが存在
することをわきまえることです。それが美学と結びつくのは、
美がそのようなものだからです」

佐々木健一 (2004) 『美学への招待』 p.222

以上、おつかれさまでした